



モンゴルからの便り

青年海外協力隊 2018年度3次隊
氏名：佐藤 恵理子 職種：小学校教育
2019年5月3日 第1回

テーマ：砂漠の町の学校

モンゴルの南、**ドルノゴビ県サインシャンド**という町にある学校に派遣され、約3か月が経過した。地方の町だが、インフラが整備され、日用品も大抵の物が手に入るため、生活上の不自由はあまりない。地域の人は、大抵顔見知りで、毎日子どもたちが外で元気に遊ぶ声が聞こえる。

ここサインシャンドは、首都ウランバートルから鉄道で南へ10時間やってきたところにある。**サイン=良い、シャンド=水源の意**がある。ドルノゴビ県の県庁所在地であり、南に中国との国境、西にはゴビ砂漠がある。そのため春は砂嵐、夏は猛暑が厳しい。この3ヶ月で、雨が降ったのは1度だけである。恐竜の化石が発見されたり、チベット仏教有数のハマリンヒード僧院などがあつたりと**観光資源が豊かな地域**でもある。町を囲む小高い丘に登れば、360度地平線が見渡せる広大な大地が広がっている。それは、誰もが気づけば思わず両手を広げているような解放感である。大地の砂の色が、赤、黄、黒、



サインシャンドの水源に、家畜の群れが水を飲みに来る。春には子羊、子ヤギの姿も多い。水たまりを飛び越したり、背中に乗り合ったり、水際に並んだりする姿が素朴で愛らしい。



ドルノゴビ県サインシャンドの町の様子。ここ2年間で、自動車の交通量が増えたという。その80%以上が日本車である。

紫、白などとまだらになっていて、不思議な雰囲気が漂っている。モンゴルの人曰く、パワーや気のようなものが大地からあふれ出しているからだという。町の中心から住宅街を抜けて車を10分走らせれば、数百頭の羊や馬をバイクで追う遊牧民に出会うはずである。

サインシャンド郡の人口は、**現在約2万人で増加傾向**にある。家の隣の公園でも、毎日近所の子どもたちが遊ぶ声が聞こえてくる。この増加に伴って、ほとんどの学校が**二部制**を行っている。つまり、午前と午後にそれぞれ6時間ずつ授業を実施しているのだ。小学部(1～5年生)で、950名の児童が在籍し、計26学級がある。日本と同様、1学級30～40人に1人の担任がおり、ほぼ全教科を教えている。さらに、私の学校でも、他のモンゴルの学校と同様、小、中、高の一貫教育を行っている。それに加え、モンゴルでは長期休みが4回あり、1年間の半分が休みになる。学校中が活気にあふれ、大人も子ども大忙しといった感がある。だが、1日の終わりに親子や兄弟が手をつないで、夕日の中を帰っていく様子は、言い得ぬ幸福感がある。

この地域で最も深刻な問題は、**ごみ処理**である。町中に割れた酒ビンの破片が散乱し、木には風で飛ばされたビニール袋が引っかかっている。街角のゴミ捨て場では、度々ごみが燃えていたり、理由は分からないが大量のタイヤを燃やしていたりする家も見かける。モンゴル人の作る美味しい家庭料理の匂いでも、草を食む馬の匂いでもない。

私はここで2年間、子どもたちと小学校教員のために活動する。主に、理科の授業の指導技術の向上を目的としているが、**地域の環境・美化**にも関連させていきたい。



遊牧民の住むゲル(移動式住居)の扉が南を向くように建てられる。冬でも中は温かい。バイクに乗って、数百頭の羊やヤギを追いかける姿がたくましい。



配属先の小学2年生が故郷の景色を描く生活科の授業。子どもたちは、家の周りや観光地ハマリンヒード寺院の様子を描いた。首都に国の半分の人口が集中するモンゴルだが、こうした故郷を愛する心情も育てたい。